映画「アクト・オブ・キリング」に寄せて

森 達也

悪夢の中に自分を見る

映画「アクト・オブ・キリング」を観始めて数分で観客は、自分がとてつもない悪夢の中にいると感じるはずだ。人を大量に殺したことを自慢げに語る男たち。しかもその殺害や拷問の方法を、男たちはカメラの前で再現する。

両手を縛って首に巻いた針金を締める方法は、ハリウッド映画からヒントを得た。これなら血も流れないし、効率よく大勢を処理できるのだ。

殺害方法を再現しながら男たちは笑う。胸を張る。一張羅のスーツを着込む。虐殺は当たり前だと力説する。

悪夢は終わらない。虐殺にふけった男たちは、今は地域の英雄となっている。支持者には現職の知事もいれば閣僚もいる。

認めざるを得ない。これは悪夢ではない。現実だ。しかも過去形ではなく現在進行形。

男たちは虐殺の大義を熱っぽく語る。自分や家族やこの国を悪の共産主義者から守らなければならないのだと。

つまり殺されるべき「彼ら」を明確に区分けしている。男たちにとって「彼ら」は徹底して「他者」なのだ。その意味では決して特異な虐殺ではない。歴史に数多ある虐殺のひとつだ。

もしも一般の犯罪のように痴情や私欲が動機ならば、数人を殺した段階で人は負荷に耐えられなくなる。ところが大義や自衛の意識は摩擦係数を下げる。他者への共感を止める。だから後ろめたさが励起しない。こうして人は何百何千人を殺す。歴史はそんな過ちの繰り返しだ。

でも普通は、時間の経過とともに大義を失う。自分を客観視するからだ。ところがこの映画に登場する男たちは、まったく変わらない。なぜならインドネシアにおいて、虐殺された「彼ら」(共産主義者)はいまだに非合法な存在とされ、多くの人に害をなす「他者」であり続けているからだ。

動物の自己認識を研究する手法として、鏡に映った自分にどのように反応するかを探るマークテストがある。鏡に映った像を自己として認識できる(つまり自己を相対化できる)動物はヒト以外にはゴリラなど大型類人猿、イルカとゾウ、そしてカササギなどといわれている。これらの動物の共通項は、他者への共感ができることだ。

この映画の制作者が男たちに提案した映画製作は、マークテストそのものだ。テーマは虐殺。キャストもスタッフも男たちが務める(ただし「前代未聞の手法」との解説は不正確で、カンボジアの虐殺を追った映画「S21」など前例はある)。

カメラの前で男たちが再現する虐殺や拷問シーンは明らかに「虚」だ。では、それを撮るもう1台のカメラ(この作品のフレーム)は「実」なのだろうか。撮ったばかりの映像を見ながら男たちは、自分の演技を確認する。そして満足げに笑う。そこに他者への共感は一片もない。これは「実」だろうか。それともこれも「虚」なのだろうか。

そこで観客は気づく。このスクリーンは実は鏡ではないのかと。ならば、映像を見ながら自己を相対化できない男たちの姿は、映画を観ている自分自身でもあるということになる。

男たちは子や孫を抱きしめる。そして笑いながら人を殺す。だから観ながら悩む。考える。罪とは何か。そして罰とは何か。

ラストで一人の男がカメラの前で変化する。虚と実が分離して、他者は自分でもあると男は気づく。若干のあざとさ(映画の意図)を感じる場面ではあるけれど、その帰結として等身大の人間がほのかに浮かび上がる。

「アクト・オブ・キリング」の一場面。1960年代にインドネシアで共産主義者らを虐殺した当事者による再現映画製作の様子

「アクト・オブ・キリング」の一場面。自身が関与した大虐殺の再現映画を孫たちと楽しむ男(中央)

「アクト・オブ・キリング」の一場面。過去の大虐殺で自身が多用した殺害方法を再現してみせる男たち

もり・たつやさん　1956年広島県生まれ、映画監督。代表作はオウム真理教のドキュメンタリー「A」。教祖の死刑確定を批判した「A3」など著書多数。明治大特任教授。

「アクト・オブ・キリング」(2012年)

監督 ジョシュア・オッペンハイマー

「アクト・オブ・キリング」　1960年代にインドネシアで50万人以上とされる共産主義者らの虐殺に関与した男たちが、再現映画を製作する様子を追ったドキュメンタリー映画。各国で受賞多数。ジョシュア・オッペンハイマー監督。2時間1分。